

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第 6 回新潟ゲノム医学研究会

日 時 平成 18 年 6 月 3 日 (土)  
午後 1 時 30 分～  
場 所 新潟大学統合脳機能研究センター  
6 階

## I. 一 般 演 題

## 1 口腔扁平苔癬における SNP 解析による疾患感受性遺伝子の探究

藤田 一・小林 哲夫\*・田井 秀明\*\*  
島田 靖子\*\*・永田 昌毅・星名 秀行  
関 雪絵・池田 順行・青柳 貴之  
斎藤 正直・西澤理史歩・黒川 亮  
中間 純子・高木 律男・吉江 弘正\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
顎顔面口腔外科学分野  
新潟大学医歯学総合病院歯科総合  
診療部\*  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
歯周診断・再建学分野\*\*

【緒言】口腔扁平苔癬 (OLP) は、歯科臨床でしばしば遭遇する難治性口腔粘膜疾患で、その原因は細胞性免疫の異常が考えられているが確定的なものはない。今回私たちは、本疾患について免疫関連遺伝子の多型解析を行ったので報告する。

【対象および方法】OLP 患者 32 名と健常者 99 名を末梢血採血後、ゲノム DNA を抽出。免疫グロブリン受容体 5 種、サイトカイン 8 種、蛋白分解酵素 1 種についてナノインベーター法<sup>®</sup>で SNP を検出し、遺伝子型頻度、アリル頻度、アリル保有率を解析後、 $\chi^2$  検定にて p 値、オッズ比、相対危険度を求めた。

【結果】TNFRFII (+ 587) において有意に G ア

リルが多く ( $p = 0.0487$ )、G アリルの保有率が高く ( $p = 0.0268$ )、オッズ比 2.7173 であった。また、IgG Fc  $\gamma$  RIIIb で NA2 アリルが多い傾向があったが有意差は認めず、他の 12 遺伝子も有意な結果は認めなかった。

【考察】TNFRFII (+ 587) 遺伝子多型は、機能的に TNF- $\alpha$  誘導アポトーシスに関連しており、SLE, RA, 重度慢性歯周炎との関連が報告されている。以上より、TNFRFII (+ 587) は OLP における疾患感受性マーカーとなる可能性が示唆された。

## 2 マイクロサテライトを用いた相関解析による歯周炎感受性遺伝子同定 — 第 19 染色体全長の解析 —

多部田康一<sup>1)</sup>・田井 秀明<sup>1)</sup>・小林 哲夫<sup>2)</sup>  
島田 靖子<sup>1)</sup>・山崎 和久<sup>3)</sup>・石原 裕一<sup>4)</sup>  
野口 俊英<sup>4)</sup>・曾我 賢彦<sup>5)</sup>・高柴 正悟<sup>5)</sup>  
小林 輝一<sup>6)</sup>・岡 晃<sup>6)</sup>・猪子 英俊<sup>6)</sup>  
吉江 弘正<sup>1)</sup>

新潟大学大学院 医歯学総合研究科  
摂食環境制御学講座 歯周診断・再建  
学分野<sup>1)</sup>  
新潟大学医歯学総合病院 歯科総合診  
療部<sup>2)</sup>  
新潟大学歯学部 口腔生命福祉学科  
口腔衛生支援学講座<sup>3)</sup>  
愛知学院大学歯学部 歯周病学講座<sup>4)</sup>  
岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科  
病態機構学講座 歯周病態学分野<sup>5)</sup>  
東海大学医学部 基礎医学系 分子生  
命科学講座<sup>6)</sup>

近年、歯周炎においても遺伝子診断の有用性が着目されている。これまでに我々のグループでは、候補遺伝子的アプローチによりいくつかの遺伝子多型と歯周炎の関連性を報告してきた。今回は、歯周炎における位置的アプローチを確立することを目的とし、第 19 染色体全長のマイクロサテライト遺伝子多型技術を応用したゲノムワイド関連解析を行ったので報告する。

軽度・重度慢性歯周炎患者各 200 名、広汎型侵襲性歯周炎 100 名、健常者 100 名を対象とし、末